

こみあげる羞恥に、全身が熱くなる。

「ああ、もう、恥ずかしいなあ」

彩姫は恥じらい、照れ隠しに優乃を抱き寄せた。

「想像してたって、どうということ？」

「それは——」

正直に告げるのは、たまらなく恥ずかしい。だけど恋心を打ち明けたときから、もう隠しごとはしないと決めたのだ。彩姫はためらいを脱ぎ捨て、弟の耳もとに唇を寄せた。

「ゆうちゃんと、エッチしてるところ」

囁いて、またギユツと優乃を抱きしめた。

「僕も——」

「え？」

「僕もお姉ちゃんとエッチしてるところ、ずっと考えてた。いつかはそうなりたいて、ずっと思ってた」

「ゆうちゃん……」

彩姫は腿に押しつけられるものをそっと握った。健気な勃起は雫をたっぷりとこぼ

し、はち切れそうに疼いている。

「もう、想像なんかしなくなたっていいんだよ。だって、わたしとゆうちゃんは、本当にエッチしちゃうんだから」

「お姉ちゃん——」

「さ、来て」

彩姫が脚を開き、優乃はその中心に腰を割りこませた。まだ幼い尖り<sup>とが</sup>は、けれど熱い想いを懸命に訴えかけながら、姉の秘割れと接触した。

「わかる？」

「うん。僕のオチン×ンの先に、お姉ちゃんのオマ×コがくつついてる」

「ヤダ、もう……」

あからさまな語句に、しかし不思議と救われる気もした。彩姫はペニスの根元に指を絡めると、自らのほうに引き寄せた。

「ゆうちゃんのオチン×ン、お姉ちゃんのオマ×コに入れて」

硬い肉槍が、少女のなかにまっすぐにのめりこんできた。

「ああうっ——」

鋭い痛みが全身を貫く。わずか十センチほどの侵入物が、脳にまで届いたように彩

姫には感じられた。

「だいじょうぶ？」

優乃の気遣いに、彩姫は努めて笑顔をこしらえた。

「うん……ちよっと痛かっただけ。でも、もう平気よ」

本当は破られたところがズキズキと痛みを訴えていたのである。しかし、ようやく最愛の弟と結ばれたことを思えば、大した苦痛ではない。

（とうとうゆうちゃんと――）

後悔はなかった。ただ、喜びだけがあつた。夢のようだった。

（これもゆうちゃんの、響姉さんの、みんなのおかげ……）

幸福に浸ると、すべての人に優しくなれる気がする。実際、ここまで辿りつけたのは、自分ひとりの力ではない。多くの支えがあつてのものなのだ。

『本当はね、初めから兄の役はヒメについてことになってたんだよ』

こつそりとほのかから打ち明けられ、彩姫はびっくりした。

『でも、キャスティングで決めても、ヒメは絶対にいやがるだろうから、ギリギリのところまで受け入れなきゃならない状況に持っていこうって計画になったの。部長や響子先生と、そういうふうに打ち合わせ済みだったんだ。で、あたしが舞台から落ち

て足を挫く<sup>く</sup>ってことになってたんだけど、まさか盲腸になっちゃうなんて』

照れて笑う親友に、彩姫は少しも騙されただなんて思う気になれなかった。むしろ、みんなの心遣いが嬉しかった。

（そう……わたしがこうしていられるのは、みんながいたから——）

最愛の弟とも結ばれ、最高に幸せだ。これからなにがあらうと、もう、怖くはない。  
「ゆうちゃんの、ちゃんと根元まで入ったね」

その部分を手探りで確認し、少女は感慨が胸に満ちるのを覚えた。

「気持ちいい？」

「うん。お姉ちゃんのなか、あつたかくて、オチン×ンにきゅってまとわりつくみたいで、すごく気持ちいい」

「わたしも、ゆうちゃんのオチン×ン、とても気持ちいいわ」

優乃が動き、彩姫は傷口をこすられる痛み<sup>いたみ</sup>に歯を食いしばった。それでも、抽送がつづけられるうちに、次第に甘やかな感覚に包みこまれる。それはひよつとしたら、生理反応として脳内に痛みを麻痺させる物質が分泌<sup>ぶんびつ</sup>されたためかもしれない。けれど、この一瞬、胸を昂<sup>たかぶ</sup>らせる想いは、まぎれもなく永遠のものだと信じられた。

姉も弟もなく、愛し合う男と女として肉体を繋げたふたりは、手足もしっかりと絡

め、唇を求め合った。悩ましい息づかいのひとつでさえ、互いに愛おしく思った。

「お姉ちゃん、僕……もう」

優乃が泣きそうに顔を歪めた。

「イッちゃいそうなの？」

「うん。あ、もう、出ちゃう」

「いいわよ。おねえちゃんに優乃の精液、いっぱいちょうだい」

「ああ、おねえちゃん!!——」

ガクガクと全身を激しく揺さぶった少年は、歓喜の吐息とともに、ありったけのエキスを放出した。体内で脈打つものと、ひろがる温かさを、彩姫もたしかに感じた。

「ゆうちゃん、大好きよ!」

なおもヒクつきをとめない弟の体を、彩姫はひっしと抱きしめた。

（幕）

